

プロ特集
市民生活を支える

安全な暖かさを、このまちに。プロフェッショナルなガス屋さん

このまちはまた冬を迎えます。心まで冷え込まないように、ガスや灯油で暮らしを支え、ときには花火で地域の節目を彩る――それが、まちのガス屋さん・合名会社田中屋商店。
代表社員の田中大輔（たなか だいすけ）さん（写真左）と専務取締役の田中昌之（たなか まさゆき）さん（写真右）は、ガスの技術者としてそれぞれ22年、10年の経験を重ねています。その仕事の根底にあるのは、まちを元気にしたいという思いでした。

10年以上の緊張が支える、ガスの安全

――ガス屋さんといえば、プロパンガスのボンベを運ぶ姿を浮かべる人も多そうです。実際にはどんな仕事が多いのでしょう？

大輔さん　おっしゃる通り、お客さんの元を訪ねてガスボンベを交換する仕事は、毎日あります。特に冬は、水温が下がってお湯をつくるのに必要な熱量が増えるため、ガスの消費量も多くなる時期です。多い日には45件ほど、社員１人で９時から17時まで回ることもあります。

昌之さん　ボンベ交換以外では、新築や改築に伴うガス配管工事、ガス設備の取り付けや修繕などのご依頼も通年あります。

――社員の方も含め３名で現場を回し、お二人も自ら現場に出ることが多いとか。技術者として、どんな点に気を付けていますか？

大輔さん　一番は安全です。排気ルートや周囲の可燃物、設置場所・方法が法令に沿っているかを、図面と現場の両方で確認します。

大輔さん　そうした確認に加えて、設備の面でも安全性が考慮されています。例えば、一定以上の揺れを感知するとガスが自動で止まるメーターを使い、地中の配管にも地盤のずれに対応しやすい素材を採用しています。
ただ、こうした仕組みがあってもガスに対して「怖い」というイメージを持つお客さんは少なくありません。**安心して使ってもらえるよう相手に合わせた説明**を心がけています。

昌之さん　10年ほど経験を重ねてきましたが、工事が終わって、最後にガス漏れがないか検査するまでは今でもやっぱりドキドキします。特に飲食店など複雑な工事では、不特定多数の方が利用する場所でもあるので**「念には念を」という気持ちで確認**しています。

大輔さん　経験を積んでも、慣れは禁物ですね。うちでは毎月スローガンを考えていて**「初心に帰る」**といった言葉を掲げることもあります。

見えない配慮が築く、100余年の信頼

――安全面以外に、仕事で心がけていることは何ですか？

大輔さん　**見えないところほど、きれいにして帰る**ことですね。例えば、床下で作業した跡をお客さん自身が見る機会はほとんどありません。でも、お客さんからの信頼を得るためにも、そういう目に触れない部分まで丁寧に仕事をするようにしています。

昌之さん　田中屋商店には、大正10年に事業を始めた初代の頃から、付き合いが続いているお客さんもいます。地元に根差して歩んできた歴史があるからこそ、**お客さんとの一つひとつの関わりを大切にしていきたい**と思っています。

――地域には年配のお客さんも多いと思います。日々の配達や点検では、どんな関わりを大切にしていますか？

大輔さん　灯油の配達も昔からやっていて、希望があれば家の中まで運びます。３階まで持って上がることもありますよ。そういう、かゆいところに手が届く対応は大事にしたいですね。

昌之さん　話しやすい関係づくりも意識しています。そのためか、点検に伺った先でおばあちゃんと話し込むうちに２時間が経っていたことも……(笑)。年配の方も多いので、普段と変わりないか、それとなく気にかけています。



先代ゆずりの明るい笑顔が弾ける大輔さん



30歳で異業種から転身し、専門資格を取得して古川町へ。最初は見習いとして兄や父から学びながら技術を身につけ、現在は現場に立つ傍ら公式インスタグラムでの発信も担当している

元気と笑顔を、まずは自分たちから

――話しやすい関係を築くうえで、広報も一役買っているのでしょうか。ホームページやSNSなど、人の「顔」が前面に出ているのが印象的です。こうした発信は、いつ頃、どんな思いから始まったのでしょうか？

大輔さん　お客さん向けの新聞『元気！通信』を始めたのが10年ほど前です。まずは田中屋商店のことを知ってもらい、身近な存在になりたいと思ったのがきっかけでした。お客さんのところへ伺ったときに「誰？」と思われないよう、顔を覚えてもらいたい。安心してもらうために顔を出していこうという方針は当初からありました。

――『元気！通信』の「元気」という言葉には、どんな思いがありますか？

大輔さん　父が豪快で、すごく元気な人なんです。『元気！通信』という名前にも、まちを元気にしたいという思いが込められています。そのためには、まず私たちが元気じゃないと駄目だよね、と。
自分たちが元気でいれば、その元気が少しずつまちにも広がっていくんじゃないか。そんな思いでやっています。

火薬店として始まった田中屋商店は、今も地域の祭りや節目に花火を打ち上げています。今年９月、神岡町にあるラーメン屋の１周年を祝う花火を、筆者も息子と自宅から眺めました。それ以来、息子は庭に出るたび「ここで花火見たね」と話します。
住む人々の暮らしに、そして心に暖かさを添える。**「あんたに頼んでよかったわ」と言ってもらえるのが何より嬉しい**と話すお二人の笑顔からは、まちに向ける思いが伝わってきました。

田中屋商店の
公式インスタグラム



市民ライター　三代知香